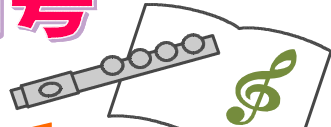


## 進学塾アペックス



# アペックス便り10月号

令和4年 10月吉日



## お知らせと今月の行事予定

※入試100日前カウントダウン開始です!!

いよいよ大学入試共通テスト/中学入試のカウントダウンが始まります。コロナ感染に気を付け計画的に受験学習に集中しよう!

※10月よりアドバンス講座/基礎充実講座が始まります【希望者のみ/受講適格者のみ】

※進学相談随時受け付けます![予約必要]

志望校選定を確固たるものにしましょう!



## 前回の続き～少年期の出逢い～

私は小学校に上がる前に、大阪市内でも有数の文教住宅地に引っ越すことになり、そこを第二の故郷として青春期を育んだ。地域では在日が殆ど存在せず、宛先無しの郵便物が、宛名だけで届いたこともあったぐらい、我が家は珍しい存在であった。大半の在日が、生野区や東成区などのコミュニティに集中して暮らす中、周囲に全く在日の居ない環境は、私には新鮮だった。一方、小学校は電車で通学しながら、韓国系の一貫校に通うことになった。小学校から高校まで同胞と在籍する結束は尋常ではなかったぐらいで、学年を跨いでどの学級にも兄弟姉妹が在籍する混沌ぶりだった。親も生きるのに精一杯追われていた為か子供の教育に目がいかず、全て学校任せの雰囲気があり、当の子供たちは毎日自由気ままに謳歌し、屈託がなく天真爛漫だった。ただし、それは学校の中だけであり、一歩学校外に踏み出せば、子供なりに、差別や虐めから我が身を守るのに全神経を張り巡らしていた。ゴッドファーザーのマーロンブランド演じる若き日のイタリア移民のリーダーのコレオーネの世界や、ワンスアポンアタイムインアメリカでのイタリア移民のニューヨークでの成り上がりを観た時に、なぜか懐かしく共鳴する感覚が少年期のこの時期と重なるぐらい同胞の結束は固く皆貧しい中でも逞し仲間を支えあって日々を過ごした記憶が蘇る。恐らく10年程は生活レベルが遅れていたと子供心に感じたぐらいに、在日同胞の仲間は貧しかった。私は市内有数の文教地区から通っていただけに、毎日がタイムマシンで通学していたと錯覚する程、私の仲間

## 今月の予定

●1日(土) 休講日

年間調整日の為

○29日(土) 全国テスト

小学生/中学生

※外部生のテスト受験も

可能です。志望校判定等

チェックしたい友達紹介

して下さい!

## 塾長の眩きブログ

は貧しかった。兄弟姉妹が4人の私は、当時のクラスの中では最低人数で、同級生のほとんどが平均8人以上の兄弟姉妹に揉まれていた。服はお下がりが当たり前、靴下を履く子は殆どいないし、弁当はおかずが有っても1品だけ、お小遣いを貰った経験のある子は皆無…。といった具合である。

今となっては時効だが、貧し故に仲間とんでもない(悪さ)に走った悲しい記憶がある。ある時仲間との付き合いで、学校帰りに電車を乗り越して、ターミナルのデパートまで足を延ばして、どうしても欲しかった文具を皆で万引きするという事件を起こしてしまったのだ。制服のままの犯行もあって、すぐに見つかり学校に通報され、担任先生が我々を引き取りに来ることになった。しばらくして、血相を変えて飛んできた担任先生は、我々の顔を見るなり号泣しながらボコボコに我々を際限なく殴り続けた。親にもこれほど殴られたことは無かったが、あまりに担任先生の悲しい嗚咽が響くものだから、最後は皆が号泣し、二度と担任先生を悲しくさせないと誓った記憶がある。その際に担任先生が放った一言は、今でも楔として心に残っている。『お前らのせいで、まじめに生きている韓国人全部が悪く思われるんや。汗水流して働いて親に報告できんから、ワシがこの手で正念入れなおす。』と…。鬼の形相で殴り続ける先生を周囲が制止する形で、結局穏便に事なきを得たのだが、まさに貧すれば鈍すの如く、貧しさゆえに出来心に流された瞬間を、懸命に我々を守ってくれた大人がいたことに泣けてきた。直接の万引きに手は出さなかったまでも、共に行動し傍観した私にも容赦はなかった。両親が知ればどれだけ悲しむだろう…。仲間全員があ的事件を契機に、我々は外からどのように見られているのか、を常に強く意識するようになった。

実際、どっぷりと日本社会の文教地区に引っ越してから、我が両親の意識や近所への気配りや行動も、尋常ではなかった。家族旅行にでも行けば、向こう三軒両隣のレベルを超えて、両親は町内会の皆に旅先のお土産を配るといふ気前の良さだったし、母はゴ出しレベルの外出でも常に小奇麗に装い、よく友達から『きれいなお母さんやな』と言われるのは子供心ながら気持ちよかった。両親が事あるごとに口にしたのは、韓国人だから、いつもきちんとしなければダメなのよ。下に見られたら終わりだから、常に人の倍は努力して、やっと普通。何でも頑張っただけで一番にならんとアカンだよ』と、常に対外的な視線を意識させられ、敏感になっていった。運動神経が鈍ければ駄目、アタマが悪ければもつと駄目、喧嘩が弱ければ死も同然とばかり、子供達には常に強さと優秀さを求め、また出来て当然だと母は子供達を信じてくれた。子供の親を喜ばせたいという本能を上手く活かした教育法で、兄弟姉妹も競って頑張った成果を親に伝え、認めて貰うのに必死であった。自然とその様な環境は、根性と負けん気だけは育つものである。また、通っていた学校の教育水準が低かったこともあり、クラスでは勉強もいつも一番だった。誰一人、家に本もない環境の仲間が大半の中では、当然と言えば当然だった。私の母は、幼い頃からの文学少女で、家には数えきれないぐらいの本が所狭しと積み上げてあった。また、母は知的な美しい世界に憧れ、子供達にも自分の夢を託していたように思う。芸術に憧れクラシック音楽や、[裏に続く]